

令和5年度

東明小だより

令和5年9月28日
第7号



「つもりのない応答」

校長 吉田 尚子

私の休日は、平日できない溜まった家の家事から始まります。掃除や片付け、そして食事の準備・・・そこまではよしとします。問題は、この後です。ひと段落すると、私は、家族からの「ありがとう」の言葉を待ちます。

しかし、主人は主人で、日頃できない畑の仕事を、他事には目もくれずせせせと行っています。せっかく、気持ちよく行ったはずなのに、私の「ありがとうといってくれて当然だろう!」という心で、穏やかな休日は台無しになります。

近所の付き合いや、防災訓練など町内の行事に参加してくれている主人に、「ありがとう」と言っていない自分に関わらず、どうしても相手には「ありがとう」の一言を求めてしまうのです。

さて、柳田聖山の『禅語の四季』の中にある「正法眼蔵 涅槃妙心」の教えを説いた文章に、こんな一説があります。

心理学者の話によると、生まれたばかりの赤ちゃんは笑わぬという。

赤ちゃんが笑い始めるのは、母親が笑って見せるからである。もちろん、まだ目も耳も働かぬけれども、赤ちゃんは自分の顔をのぞき込むお母さんの気配を感じる。「こんにちは赤ちゃん。私がママよ。」若い母は、初めてわが分身と対面する。母は、満面の笑みを浮かべている。それを感じて子は笑うのだ。

ここに教育の出発がある。

母は、笑うことを教えるつもりはなかった。

赤ちゃんは、初めて笑うことを学ぶ。赤ちゃんもまた、学ぶつもりはなかった。

つもりのない応答が、本当の学習である。



『つもりのない応答が、本当の学習である』という一言が心に残ります。

人間として生きる上で最も大切な、愛情とか感謝とか信頼といった事柄は、常に「ただで教えてもらうこと」であり、しかも日常の暮らしの中で、自然と心に染み入っていくことに違いありません。「ありがとう」と言わない親から、「ありがとう」と言える子どもが育つはずがありません。「ありがとうと言いなさい。」と百万回言うよりも、「ありがとう」をかわし続ける親の「つもりのない手本」から、子どもは「ありがとうと言うことの大切さ」を学んでいくに違いありません。

私も、今度の休日こそ、当たり前のように家の家事を行ってみるつもりです。

